

# 祭りの心を、 いつまでも変わらさず伝えたい。

厳冬の12月、山すそにはためく色とりどりの幡(旗)——900年以上の歴史を誇る「木幡の幡祭り」。その始まりは前九年の役の故事にちなみ、村人たちが源氏の白旗に見立てた幡を奉納するようになったと伝わります。もともとは旧暦11月18日に豊作や無病息災を願う祭りでしたが、担ぎ手の多くが農業以外の職に就き、平日の参加が難しくなったことから、現在は12月第一日曜日に開催されています。

祭りの主役となる五反幡は、前日に女性たちが反物を縫い合わせ、男性たちが切り出した太い竹竿に縫い付けて作られます。その幡を各堂社(9つの行政区)から出た若者が担ぎ、先達幡(白の五反幡)を先導に冬の尾根伝いを進み羽山神社に参拝し、隠津島神社に向かいます。勇壮に法螺貝が響く中、華麗な五色の幡が冬空にひるがえる様と山々とのコントラストが見事で、沿道には多くのカメラマンが訪れます。一方で15〜20kgにも及ぶ幡の重さは、吹き付ける「安達太良おろし」でさらに増し、竿を握る手にも力が入ります。華やかな祭りの裏側で、頑ななまでに守り受け継がれている伝統の重み——それが、見る人の心をつかんで離しません。



太郎餅つき



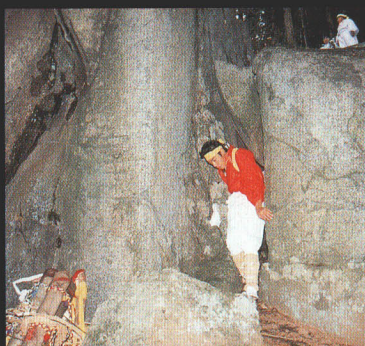
幡競争



幡行列



羽山神社参拝



■胎内くぐり・権立よばり  
参宿所より1キロ先の胎内くぐり岩に到着したら、太刀と袈裟を岩前に納め大岩の上に一人ずつ行き、70センチほどのようやく人がくぐれるほどの岩の割れ目をくぐり抜けます。全員がくぐり抜けると権立よばりの儀礼を行い、その後、険しい坂を上り羽山神社に着いたら小豆の入った粥を食べ、神社の三方に向かって参拝しやっこ一人前として扱われます。

